# 後藤嘉也（ごとうよしや）

学位の種類　博士（文学）

学位記番号　文第217号

学位授与年月日　平成17年5月12日

学位授与の要件　学位規則第4条第2項該当


学位論文題目　**他なるものの声—ハイデガーにおける循環と転回—**

論文審査委員　（主査）
教授　野家啓一　教授　清水哲郎
教授　座小田　豊
教授　篠　憲二

# 論文内容の要旨

本研究は、ハイデガーの思考に循環と転回という視点から接近し、他なるものの声への呼応を跡づけ浮き彫りにすることを目標とする。

ハイデガーは、存在する（ある）ということの意味、あるいは存在することの真理ないしエアアイグニスについて思考した。私たちは、さまざまな存在者が、また自分自身が存在するという事柄を忘れ、目の前に現在する存在者だけを追いかけている。だれが、そして自分が、どんなものを手に入れたか、手に入れなかったか、獲得しようとしているか、それだけを気にしている。または、漫然と生活して、立ち現れるものをただやりすごしている。そこでハイデガーは、存在するものからそれが存在することへと関心を転じ、〈ある〉とはどういうことかを問うた。第一の主著『存在と時間』（一九二七年）では、存在するものが存在するということの意味を、現存在の存在理解から出発し解釈学的循環に跳びこむことによって解明しようとした。これとは対照的に、第二の主著『哲学への寄与』（一九三六／三八年）では、まず存在することの真理（エアアイグニス）が人間にはたらきかけ次に人間がこれに応じるというかかわりを、すなわち転回を省察した。循環の存在論は、存在することと人間との転回の思考へと転換したわけである。

ひとやものが存在するというこのことは、だれもが口にするほとんど自明な事柄でありながら、手の届かない他なるものでもある。存在するものは隠されたさまで、すなわち他なるものとして存在する。ハイデガーは、存在するというこの異様な事柄に対して、循環あるいは転回によって思考した。それが他なるものの声への呼応である。

結論を先取りすれば、本研究がハイデガーから取り出す他なるものの声への呼応とは、隠されたあり

さまでしばし存在するもの（他人でも、自分でも、人間以外のものでもありうる）による、また存在することそのことによる呼びかけへの、つねにすでに立ち遅れた応答である。これがハイデガーの（循環への逆戻りをそのつど撤回する）転回である。そしてそれは、他なるものを当の他なるもの、ありのままのものとしてあらしめることであり、本研究はこれを他なるものの存在の倫理と名づける。

**序論**

ハイデガーについて語るにあたって、語るとは聴き、答えることだということを示したい。

語るとは、一時期のハイデガーが述べたように、(自己) 主張することであるようにも思われる。しかし、存在者を対象（主体に対して立つもの（Gegen-stand））として表象する（vor-stellen 前に立てる）近代主体主義へのハイデガーの批判にてらせば、(自己) 主張は語ることの一つの様態にすぎない。むしろ、語るとは問うことであり、問うとは語りかけに対する応答である。出来事はすでにして私に対する語りかけである。「思考の真のふるまいは問うことではありえず、語りかけを聴くことでなくてはならない。」そうだとすると、ハイデガーを語ることも、ハイデガーの言葉に耳を傾け、応じることである。

それでは、語りかけに答えることは、語りかけに同化し合致することであり、ハイデガーの言葉に応じるとは彼の言葉を忠実に描写することであろうか。そうではない。彼にとって、知性と事象との合致という意味での真理は、事象が隠されていないこと、ないし明るむ場（リヒトゥング）という根源的真理の派生態にすぎなかった。したがってハイデガーは、過去の哲学者や自作に言及するときも、著者の考えそれ自体を模写する歴史学的考察をではなく、批判的に対話する歴史的省察をめざした。これは、著者によって語られなかったこと、隠された可能性をあばき出すことである。ハイデガーについて語ることも、「解釈学とは解体である」かぎり、彼の思考を縮小コピーすることではなく、彼の声に答えてみずから考えることである。隠された可能性とは他なるものの声への呼応である。

**第一章　循環**

アリストテレスの神は、自らを思考する永遠の現実態（エネルゲイア）として、永遠に限なく自己に現前し現在している（ハイデガー用語では恒常的現前性）。だが、そうした神ではない存在者は無の闇から立ち現れて存在しはじめ、そしていつか非存在へと転じる。人間の思考も静止した自己観想（テオーリア）とは異なっており、存在することは人間につねに現前しつづけはしない。存在することは、ある面では人間に現前しあらわであるが、別の面では現前せずに隠れている。ギリシャ的な神と人間との存在上のこの相違は、すでに初期フライブルク時代（1919年から23年夏学期まで）において、ハイデガーの骨組みをなしている（〈存在と時間〉という問いは、まだ明確に定式化されてはいなかったが)。

循環はこの骨組みに支えられている。人間において、あらゆる解釈・述定的言明は、意識していようといまいと、先行理解・前述定的経験から出発するから、主題的理論的解釈をとおしてえられる結果には、前提されていたものがいわば再帰する。これが解釈学的循環である。循環の構造は、対象の十全な理論的認識とはちがう、生の明証的でありえない理解を指示しており、初期フライブルク時代における生の近さ（現前、いま目の前にあること）と遠さ（非現前、不在、目の前にあらぬこと）との指標である。それを明らかにし、存在論的な関心と実存的な関心とのかかわりもあわせて問おう。

この時期に、若きハイデガーは方法的意識の弱いリッカートからフッサール現象学に方向転換した。だが、絶対的普遍的認識たろうとするフッサール現象学とも袂を分かち、解釈学的循環を引き受けて、理論的学の基底をなす理論以前の領野へ踏み入ろうとしていた。この理論以前のものとは生（具体的で事実的な生の経験）であり、哲学は生が生を解釈し遂行する生の現象学（隠された生をあらわにするこ

と、事実性の解釈学）であった。

しかし、理論的態度においても生の遂行においても、生は生にそれとして立ち現れてはいない。生は世界（この世的なもの）に頽落しており、自己にとって自己は一つの他者である。この傾向に逆らうためには、理論的認識に準拠して生を隠蔽してきた歴史的先入見と対決し、そこから新たな可能性を汲み上げなくてはならない。歴史の沈殿とのこの批判的な対話・解体をぬきにして哲学は成立せず、「体系」と歴史は循環の関係にある。

ところで、存在論との関係についていうと、当時、存在ないし存在論という語を肯定的に用いるときにも、存在は生とほぼ同義であり、存在論は、生ないし現存在を対象とする人間学としての存在論であった。とはいえ、ものの客体的存在（恒常的現前性、つねに現在すること）と私の存在（時間的生・実存）との峻別は存在すること一般の解明を要請するから、ここにはのちの普遍的存在論や〈存在と時間〉という問いにむかう道筋がある。哲学は、人間学と存在論のあいだ、人間学史の解体と存在論史の解体のあいだ、人間学および存在論とそれらの歴史の解体とのあいだを往復する。こうして、普遍的存在論と実存的分析論のあいだを循環する『存在と時間』への道が拓かれる。これらの循環は、もっとあとで、生および存在の近さと遠さという二重性を残したまま、存在と人間との転回へと変形することになる。

## 第二章　原始キリスト教とギリシャ哲学

循環のなかを動く生の現象学と理論的認識とのこの対比は、初期フライブルク時代の宗教現象学において、有限な時間を生きる原始キリスト教と恒常的存在を観想するギリシャ哲学との対立というかたちをとる。

事実的な生経験のモデルは原始キリスト教の事実的経験であった。この事実的経験への接近は、古代ギリシャに発するロゴスの哲学の伝統に、したがってまた、絶対的客観的真理としての、あるいはその保証者としての神に背を向けることを要求する。そのためには、永遠の存在（恒常的現前性）に準拠するのを放棄し、時間的歴史的生に即応する概念系が必要である。そこでハイデガーは、現象学的解体を、「ギリシャ哲学と、またギリシャ哲学によるキリスト教的実存の歪曲と、原理的に対決すること」と定式化した。

しかし、この対決は、善が悪を駆逐するという二分法では整理できない。原始キリスト教とギリシャ哲学とは、消極的および積極的な意味で縫り合わさっているからである。パウロ以来、キリスト教にはつねにすでにギリシャ哲学とそのロゴスが絡んできたし、また、宗教現象学（ロゴス）はギリシャ哲学とそのロゴスを積極的に受け入れなくてはならない。したがって宗教現象学は、純粋なキリスト教的経験（宗教）を、ギリシャ哲学から学んだ新たな概念系によって語ろうとする（現象学）。とりわけ、アリストテレス哲学という異他なるものとの対話（即自的事実を研究する客観史的理解ではなく、実存を獲得するための遂行史的理解）がおこなわれた。

ところが、原始キリスト教とギリシャの学の根底的断絶を客観史的に指摘するオーヴァーベック神学との出会いによって、宗教現象学は宗教と現象学とに二極分解し、その後ハイデガー哲学は原理的無神論（哲学者としては神や信仰を前提しないという態度）に転じた。オーヴァーベックによれば、原始キリスト教の中核的な教えはこの世界の終末が間近いという期待であり、ギリシャの学、「この世の知恵」とは根本的に対立するからである。

それにもかかわらず、ハイデガーは（オーヴァーベックも）キリストの再臨の信仰を「死を憶えよ（メメントー・モリー）」へと形式化して受容し、相異なるものの交流のなかに身を投じていた。生が生に出会おうとするとき自

が他へと指示されることは当時からある程度洞察されていた。

### 第三章　生の存在論としての〈存在と時間〉

初期フライブルク時代に漠然と読みとられた、生についての問いと存在についての問いとの結びつきないし解釈学的循環は、『存在と時間』を頂点とするマールブルク時代(23／24年冬学期－28年夏学期)においてより明確にされた。以下でみるように、〈存在と時間〉という問いは古代存在論の反復であり、異（なるもの）を目撃して恒常的現前性を解体する。また生の存在論（生という存在および存在一般を生が解明する存在論）である。

まず、非存在・非現前ないし異他性も広義で存在・現前することに注目するプラトン論から読みとれるとおり、〈存在と時間〉の問いをあからさまに提出することによって、恒常的現前性という静的な伝統的存在理解の解体がはかられた。しかも実存の問いと存在の問いは、将来から時間化する根源的時間性が人間の存在そのものだという点で交差し循環する。

次にアリストテレスは、〈存在と時間〉という視点からみると両義的である。つまり、生滅し行為する人間の生を開示する賢慮に注目するかぎりでは、「生という特徴をもっている存在の存在論」の哲学者であるが、観想する神のごとく永続的なものを開示する知恵を賢慮に優越させるかぎりでは、恒常的現前性という伝統の継承者である。また、存在論である彼の自然学も同様である。それは、制作をモデルにして運動を解明する点では恒常的現前性を動揺させたのに、存在するとは運動が終極に達して（可能性から由来していま目の前に現在して）いる存在だとみなす点では、存在を現在から捉える伝統を脱していない。

以上の行為・制作・観想という三つのあり方における存在理解は、『存在と時間』の実存・道具存在・客体存在と類同であるが、同書は、アリストテレスとはちがって、実存を根源的様式とみなして現存在の脱自的時間性にもとづく普遍的存在論を構想した。すなわち、実存はもちろん、道具存在も客体存在も、現存在の時間性にもとづいてのみ、理解できる。生の存在論は普遍的存在論でもある。それは、時間としての実存・生を一方の端点とし、生・道具的存在・客体的存在という多様な存在を他方の端点として循環する生の存在論である。

この循環は、存在することと現存在とのあいだの、現存在に傾く非対称性の指標である。解明すべき存在の意味とは「現存在の理解可能性のうちに収まるかぎりでの存在」であった。根源的時間性は、神のように対象を産出するという意味でではなく、存在認知の地平としての時間に関してのみ根源的であり、創造的である。マールブルク時代のハイデガーは、存在論的創造を辞さず、実存の次元でも自己決定を核としていた。だが、そこでは、発見したはずの異他性、非現前・非現在の契機がふたたび見失われよう。

### 第四章　循環から転回へ

存在論の次元での存在論的創造と実存的、オンティッシュな次元での自己決定とは、解釈学的循環をなして連係していたが、この形而上学は維持できない。存在者が存在するということの異他性（非現前の契機）をまもるには、循環の彼方に位置する存在することそのことに応じなくてはならない。そのため、主著『存在と時間』の完成は放棄され、ハイデガーの思考は転換する。これは端的にいえば循環から転回への移り行きである。第二の主著『哲学への寄与』を中心に、1936年に始まるこの移行について考えたい。

この書でハイデガーが転回そのものと呼んだのは、「エアアイグニス（存在の真理）における転回」で

ある。これは、⑴「エアアイグニスはそれ自身のうちで現-存在を根拠づける」と、⑵「現－存在はエアアイグニスを根拠づける」とのかかわりをさす。⑴ 存在者を追い回すばかりで存在するということを問わない人間が存在することの真理をもとめそしてまもるとき、人間は現－存在に変化するが、この変化は人間という存在者を存在させている当のエアアイグニスが生起（エアアイグネン）させること（存在の呼びかけ）にもとづく。⑵⑴の根拠づけは、エアアイグニスという根拠を根拠であらしめる現－存在を必要とする。なお⑴と⑵は⑴が先行するからマールブルク時代とは反対の意味で非対称だが、あくまで一体である。

ふりかえれば、解釈学的循環はエアアイグニスによる根拠づけを基軸とする転回そのもののなかで生じる出来事である。ハイデガーはそれを「転回が循環の隠された根拠だ」と言い表している。循環の存在論は、いまや存在の真理と現－存在との転回のなかで、転回の思考へと移行する。存在することは循環（人間の存在理解）をこえた他なる事柄である。

だが、エアアイグニスのうちなる転回を思考することは、受動的にではあれハイデガーそのひとのおこなう投企・理解であり根拠づけである以上、転回の思考も循環のなかに引き戻されかねない。ハイデガー自身、みずからの省察が「つねにわれわれだけに向けられていた」と述べ、先行理解の介在の可能性を示唆している。⑵の根拠づけはさしあたりたいてい⑴の根拠づけに応じきれず、ときにはそれを無視してしまうことさえあろう。

ところで、たとえばハイデガーにとって決定的に重要な神々の逃亡と到着という事柄については、本研究は語るべき言葉をほとんどもたない。そのかぎりで、この転回の思考をいわば非神話化する必要がある（第六章以下）。

## 第五章　制約された主体性

循環の存在論から転回の思考への転換と転回の循環への逆戻りとは、時期を異にするハイデガーによる二つのデカルト解釈を対比することによっても、跡づけられる。

『存在と時間』期（マールブルク時代から30年代前半まで）においては、いいかえれば循環の存在論（生という存在が生など存在一般とのあいだを往来する生の存在論）においては、デカルトが理論的認識を範とする伝統的存在論に制約されて主体の存在（実存）も世界の存在も問わなかったことを批判し、デカルト的主体性を伝統から解放しようとしていた。つまり、批判の要は、主体性に依拠したことにではなく、主体性の存在を等閑に付した点にあった。このときデカルトはフッサールの原像であった。

しかし、1936年以後、主体性の限界をみきわめるようになると、デカルト哲学は、伝統の支配よりも主体性の切り開きという新しさに重心を置いて、のちのニーチェの制約されない主体性とのつながりで読み直される。対象を確実に表象するという条件にまだ制約されながら、世界を表象し征服する近代主体主義を基礎づけたのがデカルトであった。

この新たなデカルト解釈は、第一のデカルト解釈の修正であると同時に、循環の存在論それ自身に対する転回の思考からの批判である。第一の解釈が存在論的に批判して継承しようとした主体性は、存在することとの転回のかかわりを忘れているからである。

さて、この二つのデカルト像は対照的ではあるが、どちらも「主観」から独立した過去それ自体を認識する歴史学的考察ではない。デカルトの制約された主体性と対話する歴史的省察、歴史の根源を将来にもとめ、伝統のなかから自分にとっての可能性を汲み上げる省察である。したがって、解釈学的循環は転回の思考にも浸透しており、これを回避するのは困難である。それを自覚したうえで循環の彼方の他なるものにむかうこと、転回の思考の可能性の発掘（いわば非神話化）が、次章以下の課題である。

## 第六章　非現前の現前 あるいは 存在することの彼方

ハイデガー哲学とこれをこばむレヴィナス倫理学から、現前しない他なるものへの聴従を見出すことができる。

ハイデガーは、恒常的現前性という存在論の伝統を解体することによって、存在するという異他なる事柄をあらためて思考しようとした。循環から転回へと歩むことによって、いっそう、それとしては現前しないという仕方で現前する存在にしたがおうとしていた。

ところがレヴィナスは、ハイデガー哲学全体を、現前性の哲学という伝統の極限に位置するとしてしりぞけた。レヴィナスにとって、西洋哲学においては存在することは思考にゆだねられてきたのであり、主体は外部の存在者へと超出してそれを認識するかのようにみえながら、その存在を意識のなかに回収する。ハイデガーの循環の存在論はもとより転回の思考さえ、他者を自同的な主体に還元し現前させる企てである。レヴィナスは、存在することの彼方で私に命令する他者に従おうとした。

しかしハイデガーは、原始キリスト教の実存をギリシャ哲学の汚染から救い出そうとする一方でギリシャ哲学にも学んだ初期フライブルク時代から、不安の無気味さに身をさらした『存在と時間』期をへて、転回の思考においても／こそ、非現前と現前の交錯を目撃し、現前しないで現前する事柄に応対しようとした。彼は、「異他なるものと固有なものとの対決という掟」にあくまで忠実であった。

反対に、レヴィナスでさえ、生殖能力や正義についての論究においては現前化に傾斜した。これはハイデガーにおける転回への循環の巻きつきに対応する。この傾きをまぬかれないながらも、他なるものの声ないし静寂の響き（ハイデガーでは良心の沈黙せる語りや、存在の無言の声、レヴィナスでは無言で叫ぶ他者の声）に、つまり、聴きとろうと振り向くときにはもはや現前しない他なるものの声に耳を傾ける可能性が与えられている。

## 第七章　他なるものの存在の倫理

存在しようとするコナトゥスという視点から、ハイデガーとレヴィナスにおける現前化への傾斜とその撤回を再考すると、両者に共通の可能性として、他なるものの存在の倫理が見出される。

ハイデガーのいう恒常的現前性への傾きは、生あるもの、とりわけ人間のばあい、レヴィナスによって、存在しようとするコナトゥス（自己保存に向かう内的衝迫・努力）と名づけられている。双方にとって、対決すべき西洋哲学の骨格をなすのは、不断に現前しつづけることこそ存在することだという存在理解である。

この傾きは、その撤回を企図する二人の哲学者にも、前章でみた点だけでなく、集約への意志または人間中心主義（ヒューマニズム）というかたちでもつきまとう。ハイデガーにおいて、人間は、存在という根源的な集約にむかって自分をまとめ集中するかぎりで、存在の現在のうちに立ちつつ、存在するものにかかわる。科学技術による自然支配を肯定するレヴィナスは、ヒューマニズムの危うさを忘れた主体性形而上学の申し子である。しかし彼らは、他なるもののこの還元を互いに批判し、それゆえ補完する関係にある。そもそも、この還元ないしコナトゥスは、転回のかかわりにもつきまとう解釈学的先行理解ないし準超越論的制約と考えられる。

そして二様の撤回は、存在に対する存在者の優位を唱え、存在をコナトゥスと同一視するレヴィナスに反して、存在することという他なる事柄の声に聴従すること、そして他なる存在者の呼びかけに耳を傾けることである（これらは二つにして一つである）。しばしのあいだを存在する他なる存在者の、他なる存在者であらしめよという命令に応じながら、つまり、それを私に現前させようとする私の衝迫（コナトゥス）をそのつど鎮め、他なるものとして存在させながら、みずからもしばし存在すること。これは他なるものの

存在の倫理である。ハイデガーでいえば転回であり、レヴィナスの他者に対する責任である。ただし、この倫理はレヴィナスのいう身代わりとは同じではない。他なるものは人間以外のものでも自己という他者でもありえ、また、他なるものの存在可能性を他なるもの自身に与え返すからである。それは、自他のあいだの非対称の対話であり、ときには対決である。

### 第八章　循環とその外部

循環から転回への歩みは、現前を拒む他なる存在者（私という他者でもありうる）を他なる存在者であらしめよという命令に出会った。循環とその外部という視角から、レヴィナスにくわえてキルケゴールをも顧みつつ、この道筋をもう一度考えたい。他なる声への応答は、循環の外部に逃れる他なるものとのかかわりである。

客体が主体に直接ありのままに現前するという現前の構図、また主体の知が別の主体にそのまま伝わるという直接的伝達は、解釈学的循環にてらすなら不可能である。主客のあいだにも、主体と受け手の主体とのあいだにも、相互規定的な循環の関係が成り立っている。主体の先行理解が客体を規定し逆に客体が主体を規定する。この循環は、ひいては人間の対他関係そのものの図柄でもあり、自他の相互性、平等な交流（コミュニケーション）、さらには等価交換のエコノミーでもある。解釈学的循環が他なるもの（たとえばテクスト）のうちに自己を喪失してはふたたび自らのうちに帰還して自己を回復するという行路であるように、私と他者は、与えるだけ与えられる（give and take）という関係である。

だが、他なるものは循環ないし相互交流の外部に隠れる。私に理解できるのは私の視角からみた他なるものにすぎず、他なるものそのものではない。主体性は外部との関係では非真理であり、循環の彼方の現前しないで現前する他なるものに応じなくてはならない。ハイデガーの転回だけでなく、レヴィナスやキルケゴールにもこの構造が見てとれる。

他なるものとの転回のかかわりは、他なるものの現在につねにすでに立ち遅れる。そのうえ、二重の仕方で循環に立ち戻らざるをえない。(1)他なるものへの自己の関係を肯定することによって、暗黙のうちに他なるものを自己のうちに回収する。(2)特定の他なるものには応じるが、それ以外の他なるものには応じない。したがって、転回の循環への逆戻りを繰り返し撤回し、循環の内部と外部とのあいだを何度も行き来する必要がある。これが転回であり、他なるものの声に応じるというハイデガー哲学の可能性である。

それにしても、それとしては現前しないという仕方で現前する他なるものとは何か。存在すること（ハイデガー）か。ヤハウェの神ないしその痕跡としての他者の顔（レヴィナス）か。イエス・キリストとなった神（キルケゴール）か。しかし、他なるものにおいて重要なのはその名称ではなく、その立ち現れが要求する責任を負うことである。存在することは存在するものとして、無限なるヤハウェは他者の顔として、現前せずに現前する。神人はキルケゴールに、キリスト教を忘却した市民を間接的伝達によって覚醒させるよう命ずる。これらの存在者のありようこそ、現前しつつ現前しない他なるものそのものである。

### 第九章　相互理解とは別な仕方で

他なる存在者の発する他なる存在者であらしめよという命令に応じるという、ハイデガーの転回のかかわりのなかにみたこの可能性を、相互理解をあらかじめ想定するガーダマー解釈学との対比において、浮き彫りにする。

解釈学的循環への跳びこみは、ハイデガーとガーダマーの双方において、歴史の反復によってテクス

トないし他者とあらかじめ忘れられた自己とを（再）発見するという物語に動機づけられている。この解釈学は、自他の存在者の存在を発見する存在論となる。解釈とは世界と存在をめぐる自他の対話である。

存在することを問うなかで、ハイデガーは循環からその根拠としての転回（存在することと人間との非対称なかかわり）に、すなわち、存在それ自身が人間に贈った歴史的運命とこれに対する人間の応答とからなる存在の歴史にむかい、この歴史を追想する。ガーダマーは、存在の歴史を世界の存在をめぐる伝統・歴史に、歴史の追想を伝統の理解に変奏した。理解はそれが伝統に帰属するがゆえに成立する。精神科学における理解作用の根本前提は「自分が伝承によって語りかけられるのをみる」ところにある。しかし、ガーダマーにおいて、過去と現在とは世界の存在という主題を前にして、対等でもあるかのように幸運にも溶け合うことができ、彼の解釈学は転回に留意しながらも循環の内部にとどまる。

ところで、二人は、解釈の作業（存在論）が現在の状況における実践（実存）と不可分だという点を、アリストテレスの賢慮から学びとったが、転回を語るハイデガーは表立っては実践の倫理から退き、ガーダマーは自他の対称性に傾いて、真の共同性の実現をめざした。しかも、ガーダマーによれば、友愛のうちで「私たちは持続する現在に近づく」。彼の共同性ないし相互理解の理念は、恒常的現前性という存在理解を暗黙のうちに前提しており、他が他であることの否定に帰着する。ガーダマーは、ハイデガーとちがって、循環の外部にしりぞく声に耳を澄ませていない。

## 第十章　所有すること、存在すること

循環の外部に逃れるものとの転回のかかわりは、相互理解を拒みながら語りかけてくる他なる存在者、他なる存在への呼応として描き出された。それでいてハイデガーは、存在との転回のかかわりによって自己が自己となる（自己が自己に現前する、自己を所有する、自らに固有なものを獲得する）という欲望を秘めているようにも思える。存在の真理の別名ともいうべきエアアイグニスが、存在することと人間とが互いに固有なものを授けあうようにする出来事である点も、この疑いを呼び起こす。自らに固有なものの所有という契機に注目して、他なる存在者が存在することへの応答をあらためて論じよう。

自己は私に固有のものでありひいては世界も私の所有物だという私の信念にもかかわらず、固有なものはしばしば疎外され、それゆえ再所有がめざされる。世界と自己に関するこの所有モデルは、失われた自己を回復しようとする『存在と時間』期のハイデガーにもある。所有の次元における世界との日常的交渉から離脱することが、自己が自己であるという仕方での自己所有を可能にし、同時に新たな仕方での世界所有を可能にすると考えられている。

自己を再所有しようとするこの衝迫は転回への移行後のハイデガーをも突き動かしているようにみえるが、自と自、自と他の（時間的）へだたりゆえにこの試みは挫折せざるをえず、彼自身それを察知していた。所有される他なるものは存在するがままの存在者ではなく、所有する自己も存在するがままの存在者ではない。所有モデルは不十分である。

さかのぼると、かつてハイデガーは、具体的決定を各人にゆだねる形式的指示の立場をとっていたのに、三〇年代の一時期には自民族であれという自己決定ないし自己所有の形而上学に傾斜した。だがそれはやがて転換を強いられる。自己としてであれ民族としてであれ、私たちは自己以外のものに侵蝕されており、異他なるものの歓待を命じられているからである。それゆえ他なるものは、所有されずに存在するもの／存在することとして、はるか彼方から自己に呼びかけている。エアアイグニスの思索は、相互所有のモデルにのっとっているという外見に反して、他なるもののこの遠いありようを忘れな

かった。

他を所有する衝迫（循環への傾斜）に制約されたまま、自己は、ありのままのものであらしめよという他なるものの無言の呼びかけに、つねにすでに立ち遅れて応じる。自らに固有なものになるとは他に従う自己となることである。これが転回である。他は他のままで自のなかに忍びこんでいる。こうして、循環から転回へのハイデガーの歩みは、存在者を所有する強い傾きの残存から、存在者をありのままのものであらしめる、他なるものの存在の倫理への道筋である。

**第十一章　他なるものの声**

アドルノ、とくにそのハイデガー論に注目し、そこに必ずしも現前していないものをして語らせて、ハイデガーにおける他なるものの声への応答を読み解く本研究の終章とする。

自然の力に対抗するために、世界を呪術から解放すること、啓蒙ないし合理化・非神話化が太古から試みられてきた。しかし啓蒙の貫徹は自然の自然性をうばい自然と同じ暴力と化すという側面をもつ。これが啓蒙の野蛮・自然への転落（ホルクハイマーおよびアドルノ）である。啓蒙とは、いいかえれば生命あるものを生命なきものに同一化するという動向であり、自然科学においては人間の生命が物質現象となるというかたちをとる。これは、社会学的にみれば人間の物象化ないし疎外（ハイデガーとアドルノに共通の用語）を引き起こしている。人間による自然支配によって、自然と人間は物象化され断片になる。

自然支配と暗に連携した近代哲学は、二人によれば、主体-客体という図式のもとで純粋な現在という偶像を描く。自然支配と近代哲学はともに、客体を純粋に現前させて意のままにしようとする。アドルノは、物象化に反対して直接性（自然との根源的同一性）に固執する点をハイデガーから摘発し、彼の哲学を現在という偶像の陰画にするが、ハイデガーはマールブルク時代から、「或るものの現在にとって非現前性が本質的である」ことを見抜いていた。彼はかつて現在した黄金時代という幻を追う人ではない。

主体に現前しない側面を強調し自をしのぐ他に従う哲学は、ハイデガーでは存在することと人間の転回、アドルノでは主体と客体の否定弁証法となっている。もちろん、アドルノのいうように、知性の装いをまとった非合理主義を厳しく吟味しないわけにはいかないが、しかし、ハイデガーの存在することへの聴従は、盲目的屈服や野蛮・神話への転落ではない。転回は、存在するということからの呼びかけに人間が応じることによって成り立つ。存在することは人間を必要としており、だからこそ転回の循環への引き戻しも生じる。

こうしてハイデガーは、転回の思考によって、ありのままのものであらしめよという他なるものの無言の声に、そのつど循環に連れ戻され、立ち遅れ、ずれながらも応じようとした。それが、本研究が明らかにした、他なるものの存在の倫理である。

# 論文審査結果の要旨

本論文はハイデガーの「存在」をめぐる思索の軌跡を「循環」と「転回」という二つのキーワードを手がかりにして丹念に跡づけ、それを貫いている存在理解の根本姿勢を「他なるものの声への呼応」という独自の視点から特徴づけたものである。論文全体は、「はじめに」と「序論」を巻頭に配し、第一章

から十一章までの本論、および「おわりに」から構成されている。

論者は「はじめに」において、本論文の構想と狙いを簡潔に提示する。すなわちハイデガー哲学における「循環の存在論」から「転回の思考」への転換の道筋を跡づけることである。次いで「序論」においては、ハイデガーの語りかけに応えるとはいかなることかについての方法論的な省察がなされ、同時にハイデガーの真理観が合致説との対比の中で明らかにされる。さらに論者は「循環から転回への移行は、人間と存在することとのかかわりあいの方向転換である」(12頁) として自らの視座を設定し、併せて以下の各章の論述の歩みを概観して序論を閉じる。

第一章「循環――初期フライブルク時代を中心に――」では、『存在と時間』へといたる初期フライブルク時代(1919年～1923年)のハイデガーの歩みが、『ナートルプ報告』および師のリッカートやフッサールとの対決などを踏まえながら解明される。この時期の鍵概念は「生」ないしは「事実的生」であり、そこでは解釈する生と解釈される生との間に介在するもろもろの「循環」が問題とならざるをえない。その根底にあるのは、近くて遠いという「生」の両義的なあり方であり、ハイデガーはこの「循環」という根本的事態を「存在」そのものの中にも見据えつつ、『存在と時間』の問題設定へ向って歩みを進めたのである。

第二章「原始キリスト教とギリシア哲学」では、初期フライブルク時代の「宗教現象学」の構想が検討される。当時のハイデガーにとって「事実的生」のモデルは原始キリスト教の事実的経験であり、宗教現象学は理論的態度と日常的態度の双方を原始キリスト教の生経験に還元する。その上で、宗教現象学はキリスト教の即自的事実を研究する「客観史的理解」ではなく、考察する者自身の生が問われ、実存を獲得するための「遂行史的理解」を目指すのである。だが、ハイデガーはオーバーヴェックの批判神学と出会うことにより、「原理的無神論」の立場へと転向する。同時に哲学の役割は、神や信仰を前提せずに、事実的生ないしは実存の形式的構造を探究すること、いわゆる「形式的指示」の立場に見定められる。

第三章「生の存在論としての〈存在と時間〉――マールブルク時代の古代哲学解釈――」では、マールブルク時代 (1923年～1928年) のハイデガーが、プラトンおよびアリストテレスとの対話を通じて、いかにして『存在と時間』に結実する問題意識を醸成していったかが明らかにされる。まずハイデガーはプラトンの『ソピステス』解釈において、「異他性」のあり方、すなわち「非存在の存在」や「非現前の現前」に注目することによって、存在を「恒常的現前性」として捉える西洋哲学の伝統の解体に着手する。次いでハイデガーはアリストテレスの『ニコマコス倫理学』や『自然学』の内容を検討し、アリストテレスが恒常的現前性という伝統の批判者であると同時に継承者であったことを確認した上で、そこから「現存在の時間性」に依拠する存在理解に基づいた独自の普遍的存在論を構想する。その到達点こそ『存在と時間』にほかならない。

以上の第一章から第三章までは、『存在と時間』の刊行にいたるハイデガーの思索の歩みを当時の講義録等を参照することによって仔細にたどり直し、思想形成の紆余曲折を丹念に掘り起こしたものである。とりわけ、「事実的生」と「理論的認識」との間の解釈学的循環という事態が、その歩みを陰に陽に貫いていることの指摘は、論者独自の貢献として評価されてよい。

第四章「循環から転回へ――『哲学への寄与』を中心に――」では、『存在と時間』の完成が放棄され、ハイデガーの思索が「循環」から「転回」へと移行する経緯が、第二の主著である『哲学への寄与』に即して解明される。そこでの鍵概念は「エアアイグニス (存在の真理)」であり、われわれはまず「自分が存在を忘却し存在によって見捨てられているという窮境に気づかなくてはならない」(68頁) のである。存在することは人間の創造物ではなく、存在することが端的に現前することはない。存在すること

は他なる事柄であり続けており、その呼びかけに人間は常にすでに立ち遅れているのである。

第五章「制約された主体性――二つのデカルト像――」で論者は、循環の存在論から転回の思考へのハイデガーの歩みを時期を異にする二つのデカルト解釈を対比することによって浮き彫りにすることを試みる。『存在と時間』期のデカルト像は、古代・中世の存在論的伝統に制約されたデカルトが主体の存在（実存）を等閑に付した点を批判するものであった。それに対して『ニーチェ講義』期の第二のデカルト像は、世界を表象し征服する近代主体主義を基礎づけた哲学者デカルトというものである。この新たなデカルト像は、「循環の存在論」に対する「転回の思考」からの批判であった。

以上の第四章および第五章では、ハイデガーの「循環」から「転回」への歩みが彼の著作を通じて内在的にたどられている。「エアアイグニス」という概念の解釈についてはいまだ議論の余地が残っているものの、ハイデガーの「転回の思考」を「非神話化」することを試みる論者の一貫した志向は、ややもすれば神秘主義と受け止められかねない後期ハイデガーの錯綜した思索を解きほぐす有力な手がかりを与えている。

第六章「非現前の現前　あるいは　存在することの彼方」においては、一転してハイデガーに批判的なレヴィナスとの対比の中で「転回」の内実が明らかにされる。ハイデガーは存在を「恒常的現前性」とする西洋哲学の伝統を解体し、存在するという異他的なる事柄を思索にもたらそうとした。しかし、レヴィナスにとって問題となる異他的なるものとは、現前しない存在者、通り過ぎた唯一の人格神であり、その似姿としての他者である。それゆえ、レヴィナスは倫理の次元こそ決定的なものと考え、ハイデガー哲学を他者を自同的な主体に還元し現前させる企てとして退ける。

第七章「他なるものの存在の倫理――存在しようとするコナトゥス（努力・衝迫）――」では、前章を受けてハイデガーとレヴィナスとの関係が「コナトゥス」という視点から論じられる。論者は「存在しようとするコナトゥス」を事実に由来する「準超越論的制約」として特徴づけ、そこからハイデガーの「転回」すなわち「存在の無言の声への呼応」とレヴィナスの「他者に対する責任」とが、表裏一体の事柄であることを指摘する。その共通の地盤の上に浮かび上がるのが、「或る人は他なるもののために（存在する）」という他なるものの存在の倫理である。

第八章「循環とその外部」においては、レヴィナスとともにキルケゴールを参照することによって、「循環」と「転回」との関係が明らかにされる。解釈学的循環の中に巻き込まれた他者はもはや他者ではないが、他者との関係は絶えず循環という「エコノミー（交換関係）」へと回帰する。「転回」とは循環とその彼方とを行き来することであり、循環への反転を何度も打ち消してこの往還を反復することにほかならない。この点にこそ「他なるものの声に応じる」というハイデガー哲学の可能性が存する。

以上の第六章から第八章までは、ハイデガー哲学に対する強力な批判者であるレヴィナスの議論を対置することにより、ハイデガーの「転回の思考」の実相を見届けようとしたものである。とりわけ、ハイデガーとレヴィナスがともに恒常的現前性の外部にあってそれへの還元を拒む他なるものへと目を向けながら、それを対蹠的な仕方で内部へ連れ戻そうとしていたという指摘は、これまで見逃されていた両者の「相補性」を明らかにするものであり、両者の関係をめぐる議論に一石を投じるものである。

第九章「相互理解とは別な仕方で――ガーダマーとハイデガーの解釈学――」では、ガーダマーの哲学的解釈学との対比の中で、ハイデガーの「転回」の独自性が浮き彫りにされる。両者にとって、解釈とは世界と存在をめぐる自他の対話であり、解釈学とは自他の存在者の存在を発見する存在論にほかならない。だが、ガーダマーは自他の対称性に傾いており、そこから真の共同性の実現を目指す方向へ歩みを進めることによって、彼の解釈学は連帯を志向する実践となった。それに対して、ハイデガーの「転回」においては、事象と人間とは明確に非対称的であり、非力な人間に対して存在は身を隠し続けてい

る。論者によれば、ガーダマーの解釈学は「ハイデガーの転回とは対照的に、他者の、ひいては自己の非ー現前を、すなわち存在するものが現前せずに存在するということを忘却している」(155頁) のである。

第十章「所有すること、存在すること――自らに固有なるものをめぐって――」は、ハイデガーの「他なる存在への呼応」という転回の思考が、自己が自己となる（自己が自己に現前する、自己を所有する）という隠された欲望を秘めているのではないか、という論者の疑念をめぐって展開される。たしかに『存在と時間』期のハイデガーには、所有・疎外・再所有という自己と世界に関する「所有モデル」が影を落としている。しかし、「転回」を通じてハイデガーの思考は、存在の人間への帰属から人間の存在への帰属へと移行する。すなわち「自らに固有のものになるとは自己実現することというより、他に従う自となること」(172頁) なのであり、そこには他なるものをあるがままのものであらしめるという「他なるものの存在の倫理」が遠望されているのである。

第十一章「他なるものの声――ハイデガーの転回とアドルノの否定弁証法――」で論者は、ハイデガー哲学を二十世紀の神話とするアドルノのハイデガー論を取り上げることによって、ハイデガーの転回の思考を逆照射することを試みる。アドルノはハイデガーが物象化に抗して直接性（自然との根源的同一性）に固執する点を捉え、それを「非同一性」の無視ないしは消去として厳しく指弾する。しかし、論者によれば、これは明らかな読み損ないにほかならず、ハイデガーにとっては「直接性」よりは「非現前性」こそが本質的なのであり、「転回とはまず存在が人間に呼びかけ次に人間がこれに応じる非対称のかかわり」(183頁) なのである。

以上の第九章から第十一章までは、ガーダマーとアドルノという二人の哲学者を鏡としてハイデガー哲学を映し出すことにより、「他なるものの他性」が発する「ありのままのものであらしめよ」という無言の呼びかけを、一種の倫理的命法として理解しようとしたものである。論者の現代思想に関する該博な知識と的確な理解は、二十世紀哲学におけるハイデガーの位置を浮かび上がらせて間然するところがない。

最後に「おわりに」において論者は、存在することという他なる事柄の声に聴従することと、他なる存在者の呼びかけに耳を傾けることが二つにして一つのことであることを指摘し、それが「他なるものの存在の倫理」に収斂することを示唆して論を閉じる。

総じて本論文は、ハイデガーの前期および後期の哲学を「循環」と「転回」という鍵概念を軸にして統一的に理解する道を切り拓こうとした労作であり、とりわけハイデガーの著作に即した内在的考察と批判者との対質を通じた対比的考察とが両々相まってハイデガーの実像を描き出している点は論者の大きな功績といってよく、本論文が斯学の発展に寄与するものであることは疑いを容れない。

よって、本論文の提出者は、博士(文学)の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。